

はまとな魅力発見プログラム 2009

A 班活動報告書

A 班 班長 林高倫

安藤輝行 関和遊 原田萌 前田憲佑

1. 事前に

A 班としては事前準備として主にミーティングと合宿を行った。
当初、具体的なプランを練ることを試みたが事前の情報があまりに限られていたため不可能との結論に至る。そこでA班では、この事前準備の目標を

- ① 大まかな方向性を決めること
 - ② メンバーのコミュニケーションを円滑にすること
- の2点に絞り進めた。

・ 事前準備の成果物

【まずは全力で楽しもう】というチームコンセプトについてのコンセンサス。

【人に焦点を当てて進める】という方向性の決定。

人を数珠繋ぎで紹介してもらうというゲームルールの決定、およびそれに必要な説明書やポスター等の作成。何でも言い合える環境作り。

・ 事前準備として行ったこと

- ① メールでのやりとり
- ② ミーティングの開催（2回程度）
- ③ 1泊2日の合宿の開催

主に、ミーティング・合宿で目標を共有し、タスクを割り振り、各自がそのタスクを持ち帰り、メールにアップすることで準備を進めた。また、ミーティングの前に各自がそれぞれの考えをまとめてきてから会議を始められたため、短時間で効率的な議論ができた。さらに事前に合宿を行うことで、チーム内のコミュニケーションが活性化し、他チームにはないチームワークのよさを発揮することができた。

「まず全力で楽しもう」という目標のコンセンサスについてやりたいことがバラバラなチームメンバーの中で、全員から心から共感できる目標を設定する必要があった。各自のやりたいことをぶつけあった結果、「そもそも自分たちはなぜ浜頓別町に行くのか」という問いに行き着き、全員が「楽しむため」ということで一致できた。そこから「では、どうやったら楽しくグループワークの時間を使えるか」という方向に話が進み、今回の「人」に焦点を当てる方向性にまとまっていった。

- ・ 「人に焦点をあてる」という方向性について

まず、各自がやりたいことを話しているときに、「住人と土地の思い出を聞きたい」「浜頓別町にどんな人がいるのか知りたい」「なぜこんな田舎の浜頓別町にくるのだろうか？」などの【住人の想い】に焦点を当てる人が多かった。また、対立軸としてあがった自然と比較する中で、確かに浜頓別町の自然は美しいだろうが、それが「はまとんらしさ」になるのか？美しい自然なら浜頓別町ではない場所にもあるし、浜頓別町よりさらにすでに有名で美しい自然もあるのではないか、という意見が出た。そこから

「『はまとんらしさ』を体現するのは、人をおいて他にないだろう」

「結局、はまとんに惹きつけられるのも、最後は人なのではないか」

ということからA班には「人」に焦点を当てるという結論に達した。

2. 浜頓別での活動概要

- ・ ルール
- ・ 日程とその日に行った場所、あった人、やったこと

3. 提案

(添付したパンフレットを参照)

4. 第1回授業

ハマトン魅力発見プロジェクトA班は、8/8日の浜頓別町民に向けたプロジェクトの発表会において、ハマトン大学という企画を提案した。そこで当初予定してはいなかったが、教育委員会の牧野 聖氏の協力を得、「本の書き方」というテーマで第一回目の講義を行った。

- ・ 講義に寄せられた感想

講義を受けた方々から、

「文章を書く時の参考になりました。」

「自分の得意な分野を周りの人々に広める事が出来る良い機会になるのでは。」

「自分の考えを語ることで、周りの人でなく、自らの視野も広がるような気がします」

* 一部抜粋

等様々な意見が寄せられた。

- ・ 受講票送付に関して

去る8/8の第一回講義の参加者に対して、ハマトン大学の受講票を送付した。住所は任意に署名されたものであり、使用については発表会にて説明済みである。

- ・ 講義の総括

第一回の講義は当初の予定には無く、即興にもかかわらず、成功を収める事が出来た。それには何より、講師牧野の協力が欠かせなかったわけだが、受講生の積極的な参加もその要因である。感想にもあったように、文章を書くというのは極身近な行動であり、受講生はある一定の成果物を得たように思われる。今回の授業では、講師が自らの経験を周りに広めることによって、本人は更にそれをつき詰めようとし、受講者は講義をきっかけに物事に対するやってみようという意欲を呼び起こすことができたのではないだろうか。そしてこれを繋いで行く事ができれば、ハマトン大学の理想郷が出来上がるように思われる。このようにハマトン大学は、人と人とを結びつけ、更に各々が高まっていく事でより活性化していくのではないか。

5. 活動を終えて

～住民の方と一体となれる戦略を～

>成果・・・企画の方針の決定について住民から高い評価/模擬講義の実現

オーディエンスの方からの高い評価

発表において「あったらいいのに」、「ぜひやりたい」という声を多く寄せていただいた。

中には、かなり真剣に今回のはまとん大学構想の可能性を語ってくださる住民の方もいた。

・模擬講義の開催

牧野さんの協力もあり、はまとん大学の模擬講義を開催することができた。実際に講義をすること自体がそれほど難しいことではないことが証明できたと思う。

>問題

・模擬講義についての準備不足

模擬講義も当日の思いつきで実現の流れとなったため、当方として事前の準備ができていなかった。

そのため、タイムマネジメントや感想文の集め方など、運営の仕方が稚拙になってしまった。

・感想文の提出はほとんどなかった。

感想文の提出がほとんどなかった。

当方の準備不足がある一方で、現段階では「はまとん大学」構想について、多くの住民の方の広い協力までは得られない可能性を感じた。

>今後の課題・・・実際に住民の方と一体となって進む戦略の策定

今回の成果と問題点を踏まえての今後の課題は住民の方と一体となって進む戦略の策定だ。

はまとん大学実現のためには、学生となり先生となる住民の方の主体的な参加が不可欠だからだ。

しかし、今回の感想文の提出率の低さをかんがみるに、現段階では「はまとん大学」に深い理解が得られているとはいえない。

そのために住民の方をいかに巻き込んでいくのか、具体的には住民の方のいかに「はまとん大学に参加したい」と思ってもらいアクションに結び付けていくか、という戦略が重要だと思う。広報活動やスムーズに講義が運営できるような仕組み、あるいは住民の方が「参加したい」というインセンティブづくりといった様々な方法をきちんと計画し実行することが肝心だろう。

●感想

浜頓別町の魅力と感謝

今回のプロジェクトを通じて住民の方には大変にお世話になりました。東京から来た「ただの学生」をこれほど温かく迎えていただけたことが、私はいれなかったです。本当にありがとうございました。

私は今回、浜頓別町で多くの方とお話させていただく中で、浜頓別町にある「地域」の温かい力を感じました。それは住民の方一人一人の根底にある「浜頓別町が好きだ」という思いではないかと思えます。確かに、お話を伺っていても「浜頓別町なんて何もないからね」「なんでこんなところに来たの？」というような浜頓別町を「自嘲」するような言葉も多く聞きましたし、学生が「住民の方に話を聞いて『浜頓別町に魅力がない』と言われました」と発表するたびに、共感とも思えるような笑いが起きました。はじめ私は、住民の方は「浜頓別町が嫌いなのではないかしらん」と思ってしまったほどです。

しかし、今私はそうは思いません。むしろ多くの方が自分の彼女を「すごくかわいいんだよ！！」と他の人に紹介しないのと同じように、自分の身近な存在を褒めるのに照れる。あるいは妻に「愛している」といえないように、当たり前のことほど恥ずかしくていえない。というのと同じような親密な信頼関係が、浜頓別町と住民の間に醸成されているのではないかと思っています。また、そうした地域と住民の深いつながりを羨ましくも思いました。

大学や新聞などで「地方分権」が様々な場で叫ばれ、民主党は大きな目玉に「地域主権」を大きな目標として掲げているようです。これからの地域主体の時代において、浜頓別町と住民の方の温かい信頼の関係は大きな力になるのではないかなと思いました。

さて、今回のプロジェクトでは、「はまとん大学」をつくるというグループ活動だけでなく、このバーベキューで住民の方にいろいろ勉強させていただいたり、酪農見学させていただきだけでなく説明までして頂いたり、カヌー体験を準備して頂いたり、船でホタテを食べたり、さらに車までかしていただくなど本当に「いたせり尽くせり」の歓迎を頂きました。私自身、多くの出会いがあり、刺激があり、貴重な体験があり、モラトリアム最後の夏休みにとても楽しい時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

他方で、そうした歓迎に見合うだけの成果を上げられたか、といわれれば答えに窮してしまいます。ですから、私はこれから今回の体験を糧にもっともつと成長し、今回の貴重なご縁を大切に、長い時間をかけて、何かお返しできることができればと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

(前田憲佑)

今回『ハマトン魅力発見プロジェクト』に参加してみて、六日間という短い期間ではあったが、浜頓別という場所に興味を持ちました。現地に行くまではどうしたらこの町の過疎を止められるのかであったり、何かこの町で核となるようなビジネスは作れないかなど色々と議論していたが、行ったこともない人達がそれを議論するのもおかしな話だと今は考えています。現地の方の考えている事と、外からやってきた人達の考えている事は必ずしも一致しないわけで、今回のようなプロジェクトがあっても、みんながハッピーな成果物は中々出せないものだとも感じました。

私個人における今回の一番の成果物は、浜頓別という土地を知ることができた事だと考えています。旅行と何が違うの？と聞かれると上手くこたえる事が出来ませんが、このような縁がある事が一番大切なことなのではないかと思っています。これからの事はよくわかりませんが、プロジェクトを通して新しい縁が生まれ、そこからまた次の何かに続いていくでしょう。

最後に、今回このプロジェクトを実のある物にできたのは、現地の方々を始め様々な方々のご協力の賜物であり、誠に感謝している次第であります。

(関和遊)

文化というのは、それ相応の「歴史性」を包含しなければ正統性が発生し難い側面が多分にあると思います。ある程度の継続と、担い手の忍耐、絶えずプログラムを改良して行く建設的姿勢、そして参加者の自発的取り組みが欠かせません。私が昨年から足を運んでいる長野県・阿智村の取り組みの中でも、例えば、新たにお祭りを始めようという枠組みの中で、学芸員をお祭りの進行役として配置しながら、観光客の前で説明をさせて行く手法を取りましたが、結果的にまだ新しい取り組みであるが故に段取りを始め不安定さが目立ち、現在正念場を迎えつつあるところではあります。文化財にも匹敵するような厳かな建物を前に、新たな遊園地のアトラクションを見せられているような、非常にアンバラ

ンスな印象をうけてしまうのが最大の欠点で、だからと言って、今の形が全て否定されるべき構成であるとは言い切れず、改善点を主催者・参加者の双方からの意見を基に洗い出して行く他は無いと思います。仮に「はまとん」大学を始めるにしても、当初は「物珍しさ」である程度の認知度を上げ、その後の安定期にいかにか絶えずアイデアを振り絞って行けるかが鍵です。

(林高倫)

6. 提案を実行する為に

- ・ はじめるきっかけづくり

①授業を受ける→教えたくなる→自信になる→意欲が出る→町の活性化につながる＝◎

…町の皆さんがはまとん大学に足を運び、兎にも角にも授業を受ける事で、次第に授業を受けるだけでは満足出来なくなり、学んだ事を家に持ち帰って実践し、習得した上で今度は自分が先生となって多くの生徒に対して授業をする事で、自己実現ややりがいを感じて、生きる喜びと共に自信を取り戻す事となり、興味関心が多岐に渡るようになって、積極的に行動し、意欲的に参加して、その結果、町の活性化につながるという好循環が出来る。

②出会いが生まれる→情報共有出来る→新しい発見がある→刺激になる→活性化に＝◎

…町の皆さんがはまとん大学に足を運び、兎にも角にも授業を受ける事で、多様な人々が一堂に会する機会が生まれる事となり、互いが、挨拶を始めとしたコミュニケーションを重ねる事によって、相互の人間関係を深め、相手の新たな一面を知り、と同時に、今まで気付かなかった自分の個性を見出すきっかけとなり、講義を通じて、或いは、先生と生徒という関係性を築きながら、お互いがお互いを刺激し合いながら、盛り上げるのである。

③新しい試みである→面白い講義がある→注目を浴びる→外から人が来る→活性化＝◎

…町の皆さんがはまとん大学に足を運び、兎にも角にも授業を受ける事で、新しい試みとしての「市民講座」が時間をかけて地域に定着して行き、行かなければ勿体無いと感じるような魅力的な講座が次第に増えて行くことで、町全体ではまとん大学の取り組みを注目するようになり、また、町の外からやって来た人々によって、はまとん大学の取り組みが口コミで伝わる事になり、町の中

の交流熱、町の中と外との双方向性が高まるのである。

・ 参考例

①NPO 法人シブヤ大学 (<http://www.shibuya-univ.net/>)

広く一般市民に対して、社会教育に関する講演会やイベント、小中学校の総合的な学習への授業カリキュラムの提案等の教育事業を行い、もってあらゆる世代の人々が生涯にわたって学び続け、いきいきとした生活が送れる社会の実現に寄与するという目標のもと、渋谷区の生涯学習事業の助成金を元にスタートしたまちづくり NPO の大学。

授業コーディネーターや資金調達は法人が請おっており、授業の運営は主に 200 人いるボランティアメンバーが行う。現在全国に 1 万人を超える生徒を有す。今年で設立 3 周年を迎え、ノウハウを移転して京都にカラスマ大学、名古屋に大ナゴヤ大学、札幌にオオドオリ大学等の姉妹校を設立し多くの地域に広がってきている。

活動指針は以下のようになっている。

- あまり一般に知られていない、優れた、興味深い活動を紹介／異なる文化や考え方の交流／新しい分野、先駆者／昔の知恵、再発見
 - 気持ちが楽しくなる／新しいアイデアやものづくり／暮らしの充実
 - 文化も資源も豊かな未来を作る／個人の自立／助け合い、コミュニティ
- ※シブヤ大学では、若者への訴求のためにはエンターテインメント性も大事と考えます。
- 渋谷のリソースを生かした産官学コラボレーションにより新しい価値を生み出し、地域社会の活性化をはかります。
 - 学びたい気持ちを持つ人が集まり、互いに教え学びあう、学びの場をプロデュースします。